鳥獣戯画

岩波写真文庫　163

岩波写真文庫 163

鳥獣戯画

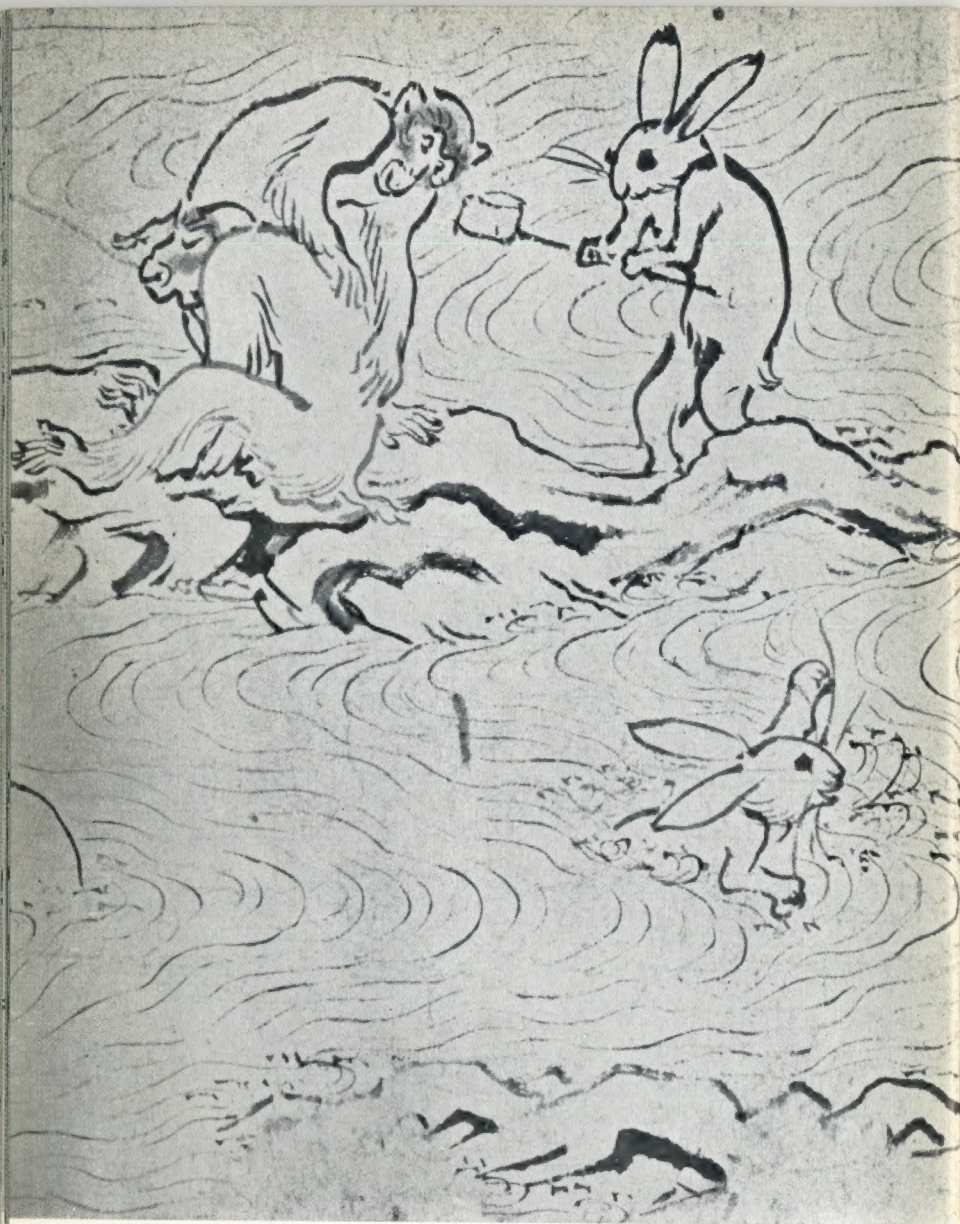
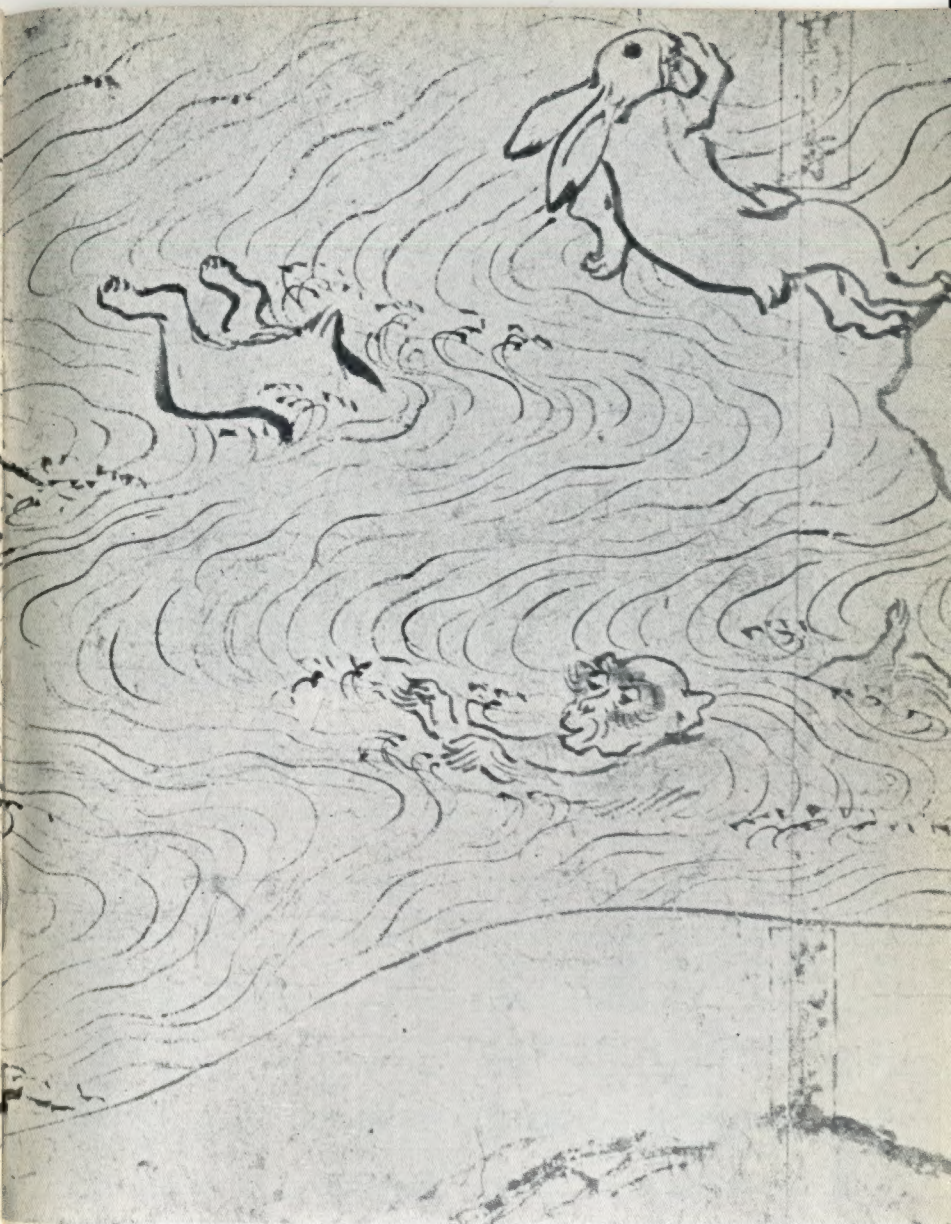
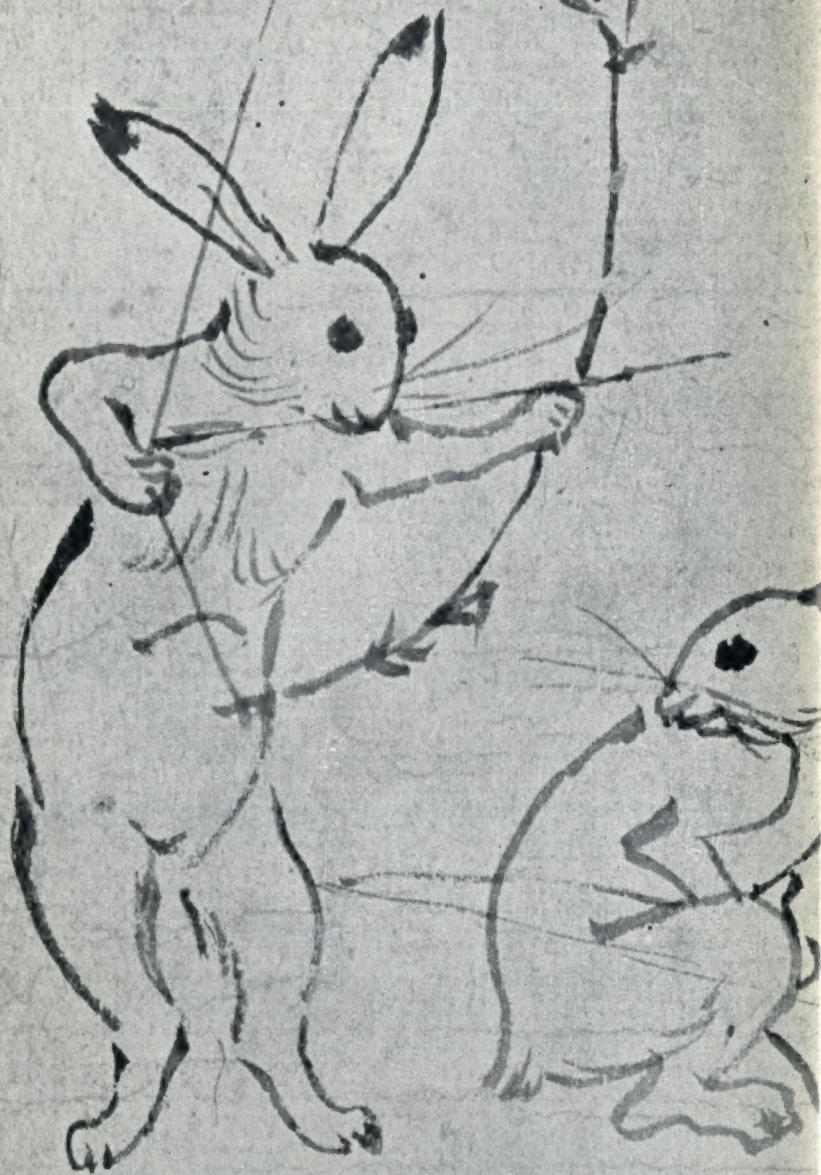
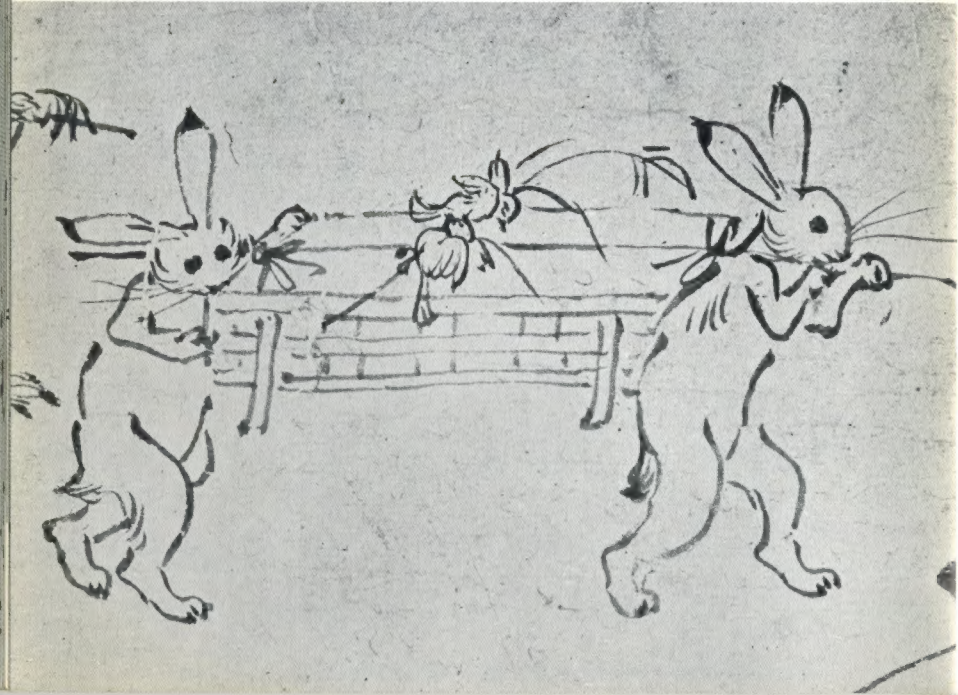
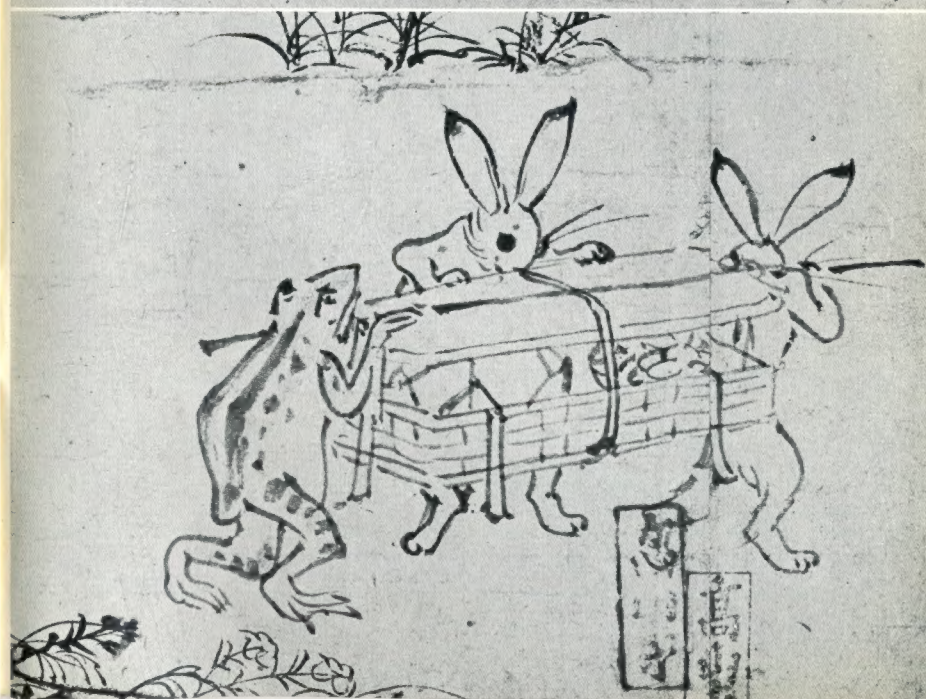
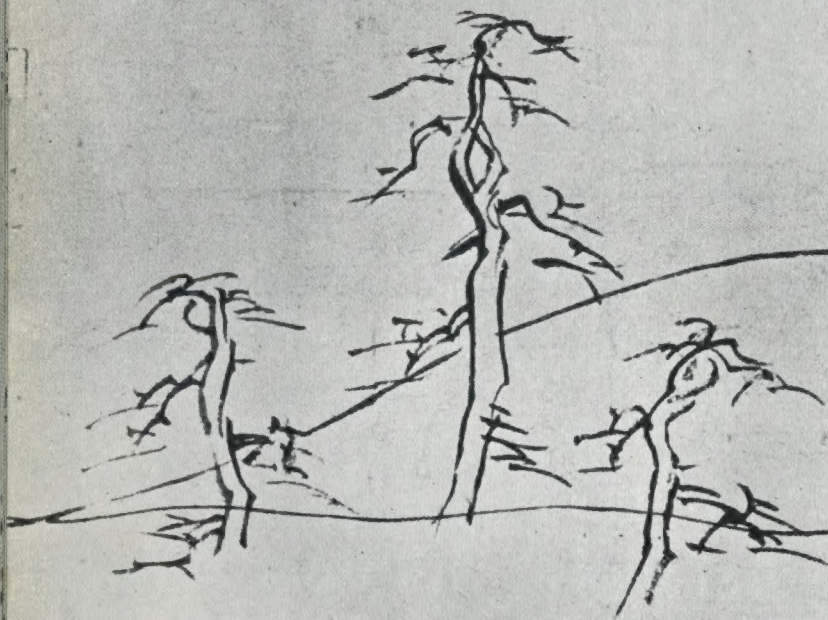
編集　岩波書店編集部
監修　奥平英雄
写真　岩波映画製作所

鳥獣戯画について

紅葉の名所として名高い京都栂尾の高山寺には、鳥羽僧正の筆と伝える四巻の絵巻がある。これは絵巻の名品として一般には鳥獣戯画の名でもてはやされているが、詳しくみると各巻とも内容が異なっている。第一巻は猿・兎・蛙などが人真似をして遊び興じているさまを描いたもので「鳥獣戯画巻」と呼ばれ、この巻がもっとも人々に親しまれている。第二巻は馬・牛・鶏・鷹・獅子・竜・麒麟など、空想的なものも含めて動物の生態を描写したもので「鳥獣写生巻」ともいわれている。第三巻は二つにわかれ、前半は僧侶や俗人などが勝負事に興ずるさま、後半はまた猿・兎・蛙などの人真似して嬉戯するさまを描いたもので「人物鳥獣戯画巻」ともいうべきもの。第四巻は第三巻の前半にやや近いもので、僧侶や俗人たちの遊び興ずるさまを主としてかいているので「人物戯画巻」ともいわれている。このように四巻の内容も異なり、各巻の名称も異なっているが、ここではこれまで人々に親しまれてきた「鳥獣戯画」の名で全体を呼んでおこうと思う。日本の絵巻は、大体詞書(文章)と絵とで出来上っているが、この絵巻には詞書がなく、全巻墨がきの線を自由に用いて描きつらねた白描画の巻物である。その描写作風を見ると、第一、第二の両巻は同筆とみなされ、第三巻の前半後半、第四巻などはいずれもそれぞれ筆致を異にする点が多く、別個の筆と見られている。これらのうち、第一巻の描写がもっともすぐれ、その秀抜なことはわが国白描画の最高峯といっても過言でない。次に第二巻がこれについですぐれており、この両巻は十二世紀(平安後期)の製作とみられている。これにくらべると第三、第四巻は画格も低く、時代も下り、十三世紀(鎌倉期)に入っての製作とみられている。これらの諸巻の筆者については、これまで鳥羽僧正覚猷(一〇五三―一一四〇)の筆として喧伝されてきたが、覚猷筆という確証はなく、また右のように四巻同一筆者の作とは考えられないものである。ただ第一、第二の両巻の製作年代は、僧正の在世年代とあまり隔らぬ頃と思われ、殊にその作風には当時の仏画や図像本などの描写に共通する点がうかがわれることから、当時画技に練達した画僧かまたは絵仏師の筆になるものと推察されている。他の二巻もおそらくまた同じ系統の作家の手によって順次描きつがれたものであろう。これらの点は、この絵巻の主題に僧侶の姿や仏教関係の事件、またはその戯画化とみるべきものの多いことからも推察される。この絵巻の内容が、それぞれどういう意味をもっているか、その解釈に関しては種々の議論がある。本来日本の絵巻は前述のように詞書と絵から出来ており、文章と絵と相寄り相扶けて物語を進めて行くのが特徴であるが、鳥獣戯画は異例で詞書を欠くために、種々の解釈が行われている。例えば僧徒の横暴を諷刺したものであるとか、六道めぐりを描いたものであるとか、或いは獣類説話を描いたものであるなどの説がある。しかしこの絵巻を概観すると、各巻とも別に一貫した筋をもったものではなく、単なる個々の画題を捉えてこれを諷刺的に、諧謔的に、或いは写生的に描いたという印象がつよい。それ故この中にあえて物語的な筋や意味を求めなくても、この絵巻は充分に我々を楽しませ、かつよく惹きつけるものがある。

萩の花の咲く前で、兎と蛙が必死に相撲をとっている。蛙がついに勝って兎は地面にひっくりかえる。それを見ていた他の蛙たちが声をあげて笑いころげる。一目散に猿が逃げている。その猿を逃がしはせぬと兎が追いかける。それ逃がすなと蛙がつづく。――こんな場面をかいた絵を、日本人なら誰でも知っているだろう。鳥羽僧正の描いた絵として、この鳥獣戯画の絵はあまりに有名である。そしてこれほど国民の間に親しまれている絵もまた珍しい。いや日本の国だけでなく、外国人の間でもこの絵は驚歎と賞讃とを博してきた。東洋画独得の墨の線で描かれたこの絵は、およそ描線の発揮しうる可能性の極限を示した。この線は縦横無尽にかけまわり、跳躍し、猿となり、兎となり、蛙となって造形の秘術をつくす。私たちは造形の奇蹟に驚歎しながら、この無邪気でユーモアに充ちた世界に微笑を送る。

目次

定価100円 1955年9月25日 第1刷発行 1960年10月20日 第5刷発行 © 発行者 岩波雄二郎 印刷者 米屋勇 印刷所 東京都港区芝浦2ノ1 半七写真印刷工業株式会社 製本所 永井製本所 発行所 東京都千代田区神田一ツ橋2ノ3 株式会社岩波書店

第一巻より―流れに抜手を切って泳ぐ兎と猿，うしろ向きに飛びこむ兎，岩の上で背中を流してもらっている猿など，第一巻はまずこの渓流の場面から始まる．擬人化された動物たちの遊び戯れる動作は，実に真に迫るとともに見るから朗らかな気分に充ちている．濃墨と淡墨とを巧みに使いわけた線がきで，筆頭にあたりをつけてすうっと引いた線は爽快そのものだ．水を描く柔かい筆法，筆の穂先を斜に押して描いた岩の皴法など，筆を運ぶ技倆は全く非凡である．画面全体が童話的な無邪気な気分に溢れていて実にほほえましい．

高山寺

最初の渓流の場面につづいて賭弓の場面が現われる．矢をつがえる兎，弓杖をつく蛙，後に控えて見まもるもの，小手調べをするものなどいかにもうまい．蓮の葉の的に向っている狐は狐火を照らしているのであろう．つづいて兎や蛙や狐が酒肴を運ぶ画面が相ついで現われる．その間に友をさし招く兎と，これに答えてとんで行く兎（本頁）とを描く．道ばたの草は芒と女郎花だから時は秋の季節だろう．渓流の場面といい，賭弓の場面といい，動物が人間の真似するおかしさ，罪のない無邪気さがひとびとの心に温かい笑いをおくる．

袈裟を着た猿僧正の前に，鹿をひく兎，猪をひく蛙，猿僧正に平伏する狩衣姿の猿などを描いている．法会によばれた猿僧正に引出物を献上する光景だという説があるがよくわからない．この第一巻の中にあらわれる兎は41匹でもっとも多く，以下蛙25，猿16，狐11，猫3，鹿2，鼠2，猪1，雉子1，梟1というふうに，合計103匹の鳥獣を描いている．どのページを開いても目につくように，きわめて簡単な線でこれら動物のかたちをよくとらえ，しかもいきいきとした姿や表情を如実に描破しているのは，全く驚歎するほかはない．

逃げる猿とこれを追う兎と蛙，このつぎには蛙が仰向けにひっくり返っているから，おそらく逃げる猿の仕業であろう．猿と兎と蛙は軽快で抑揚と動勢に富む線で，秋草は変化のない単調な線で，土手の皴は側筆の線で，というふうに運筆に変化があり神経がゆきとどいている．３匹の動物の呼吸もぴったり合っていて，画家の演出は巧妙をきわめている．前にも述べたように，この巻に出てくる動物103匹のうち兎が最も多く，蛙と猿がこれにつづく．したがってこの三つの動物が最も馴染深く親しいが，描写もなかなか冴えている．

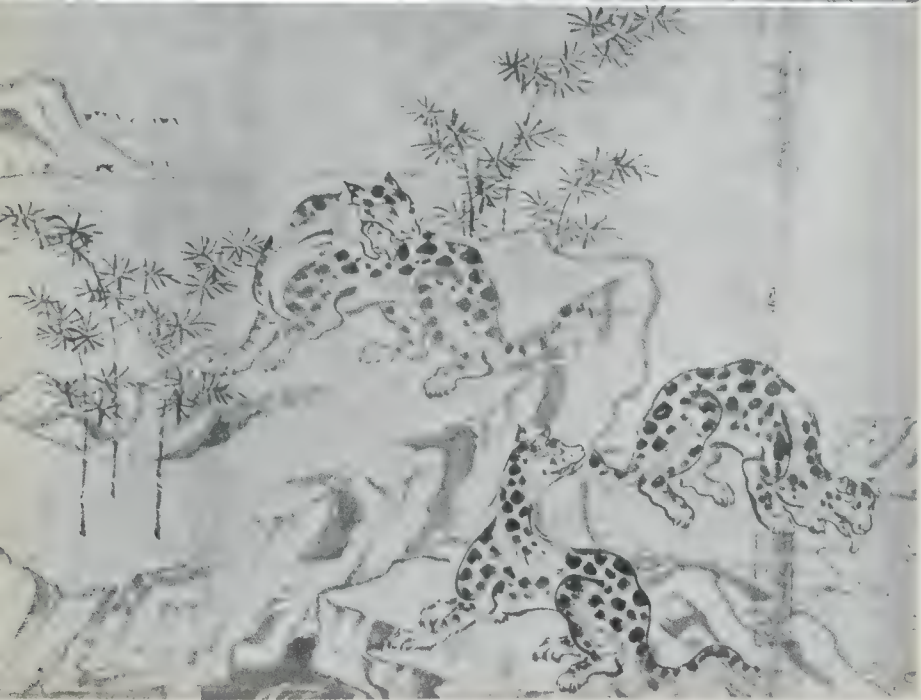
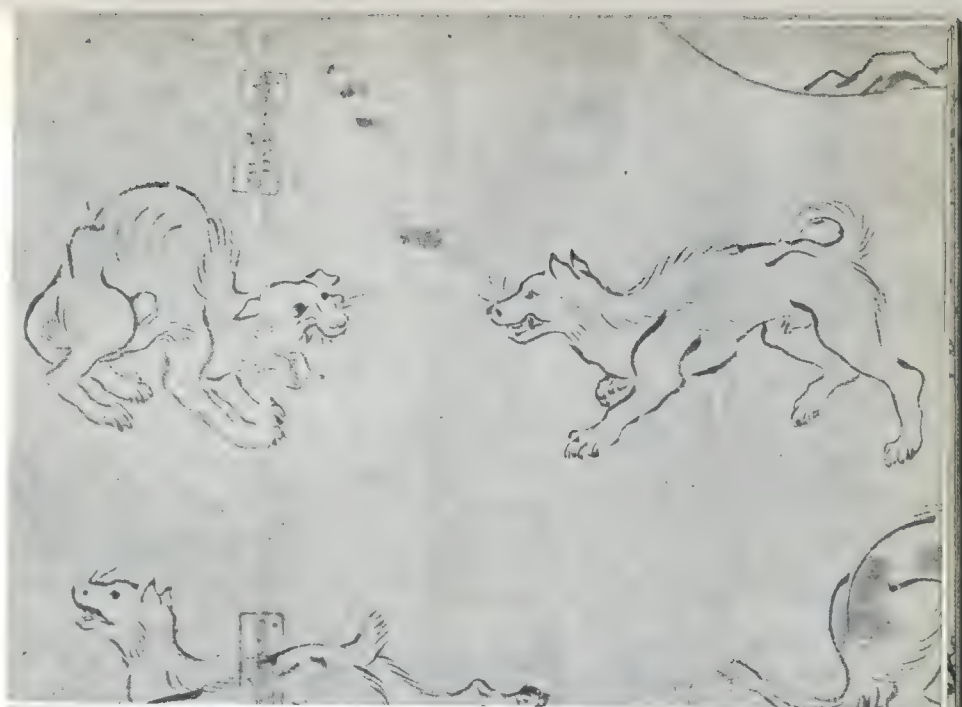
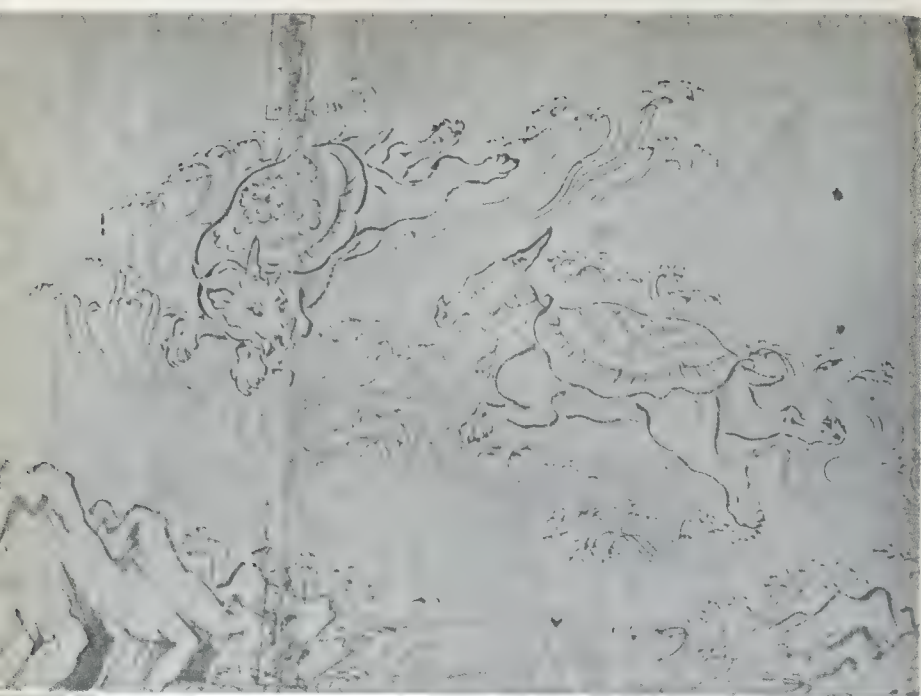
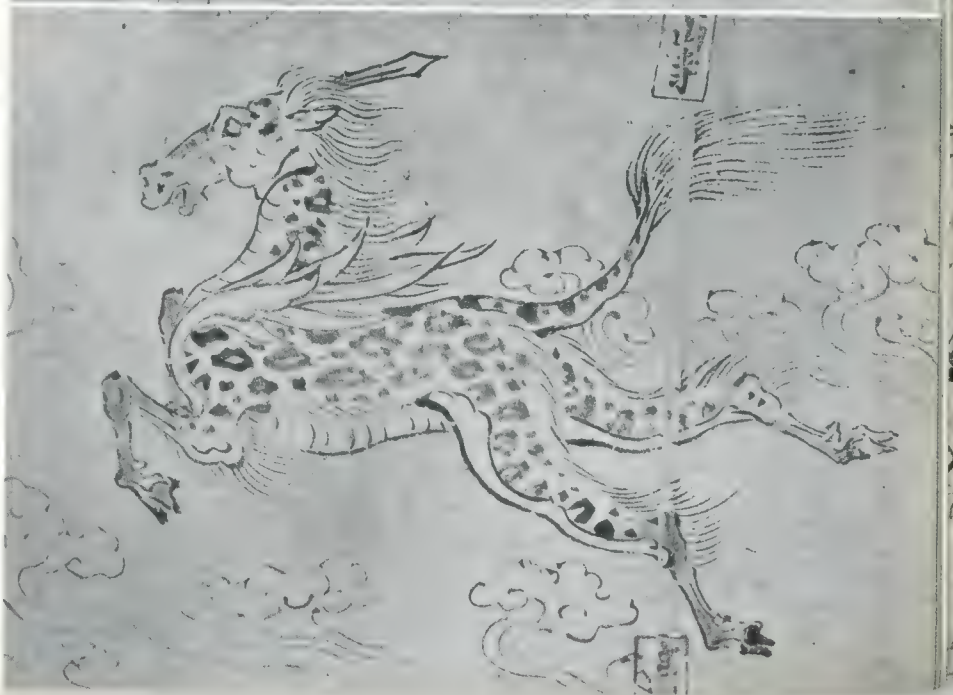
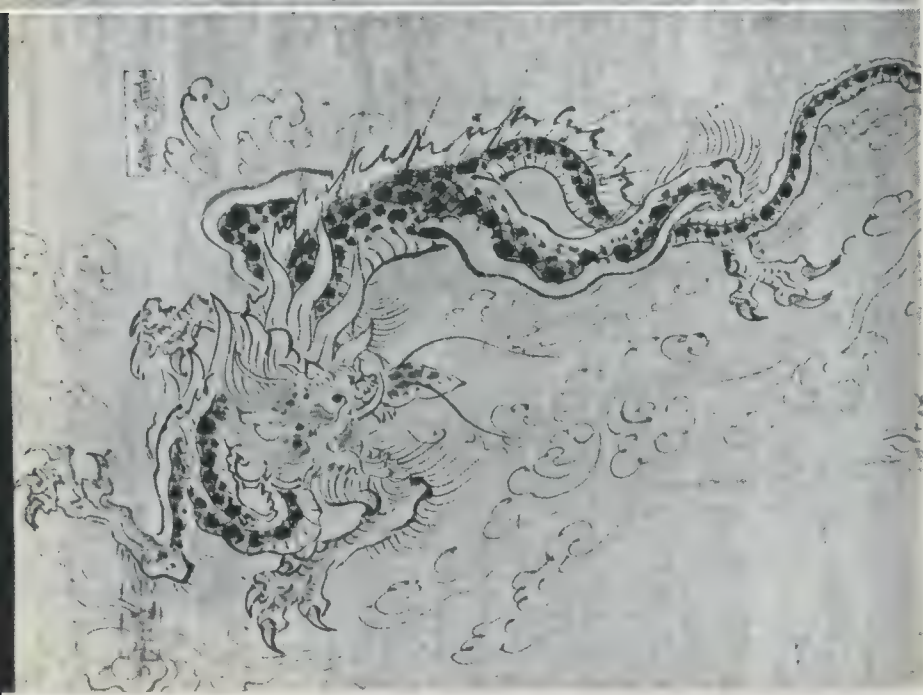
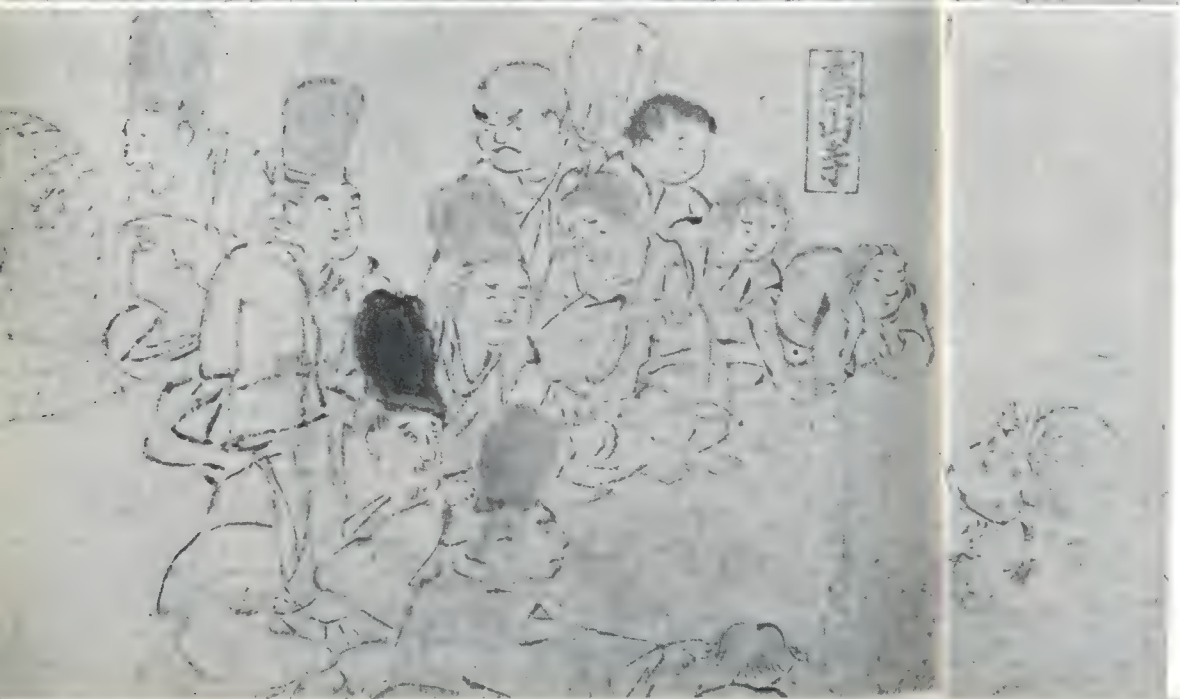
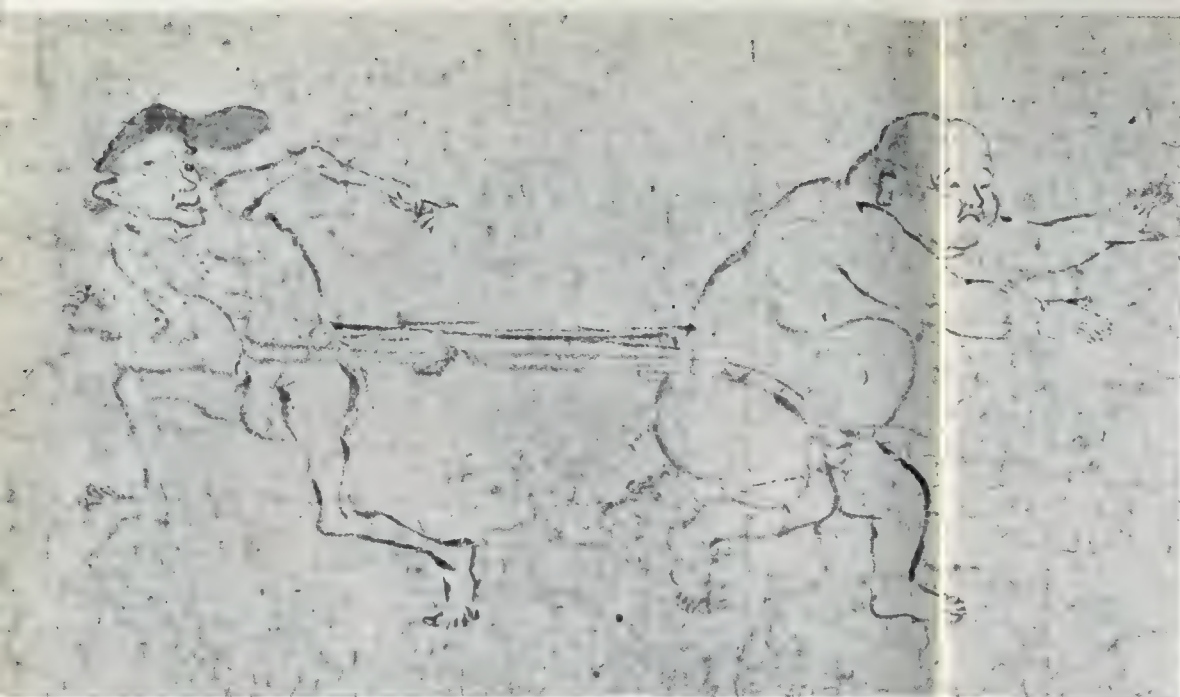
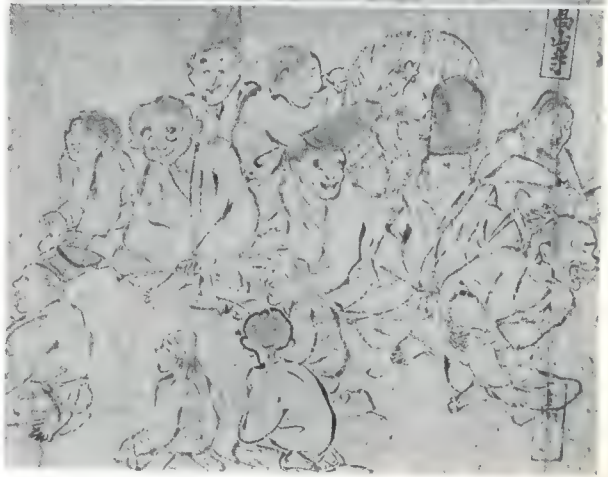
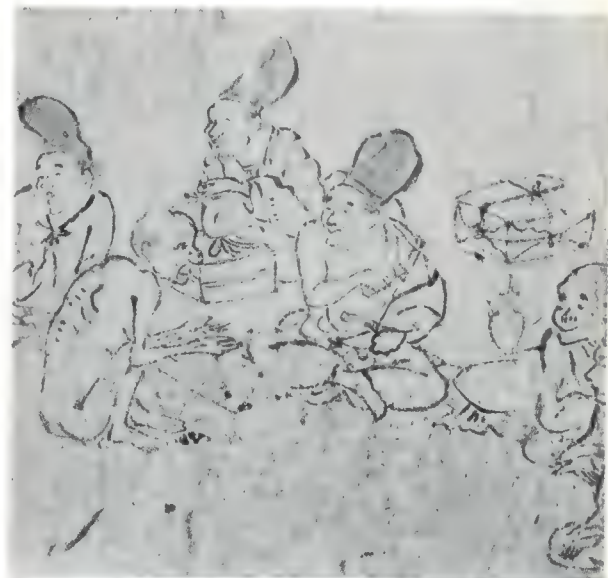
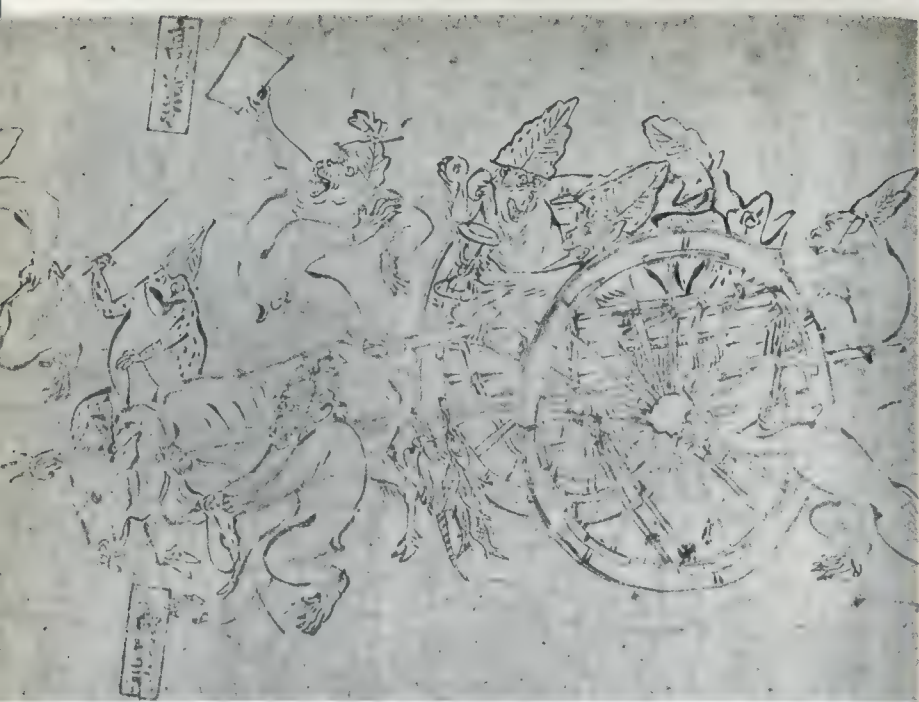
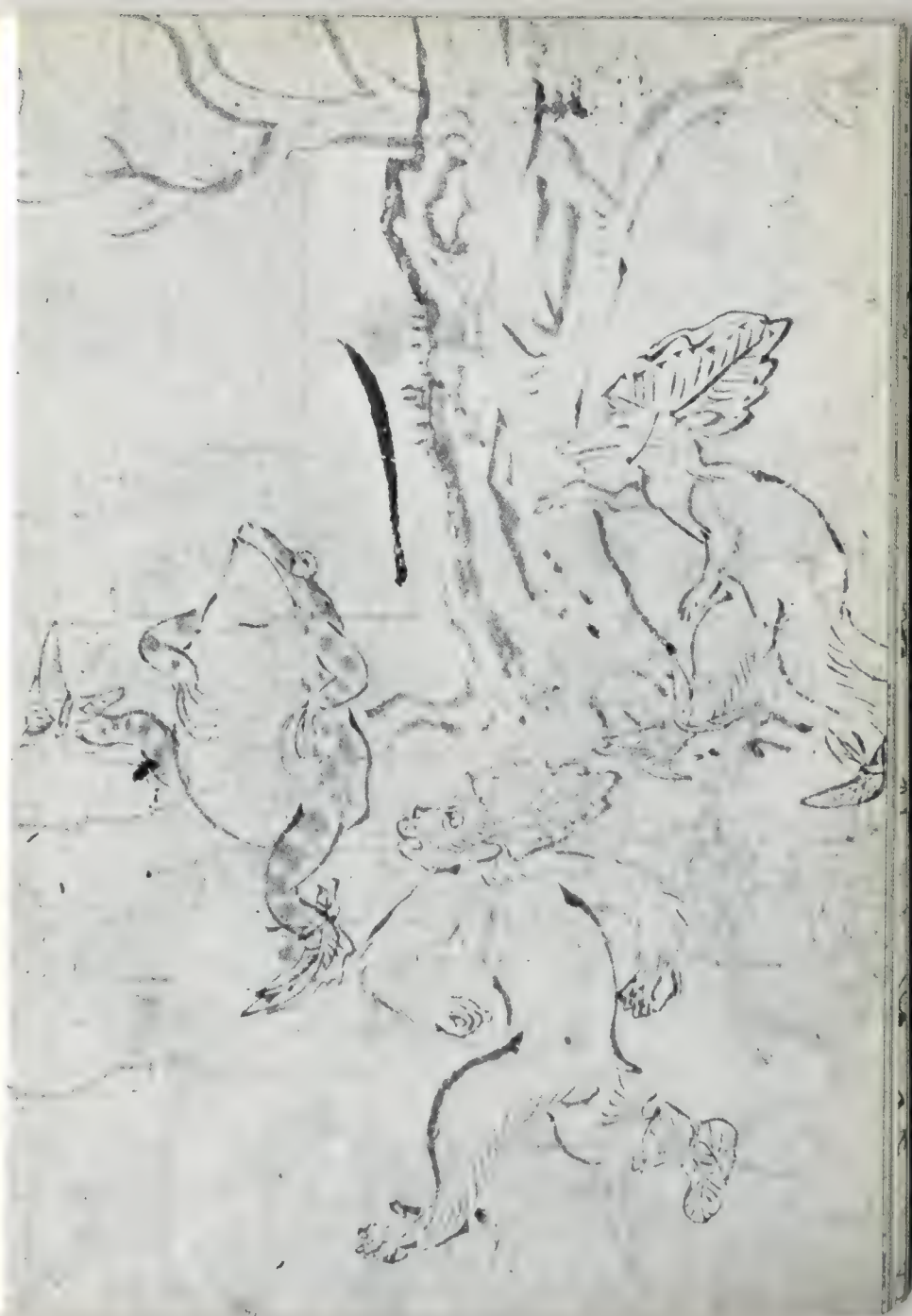
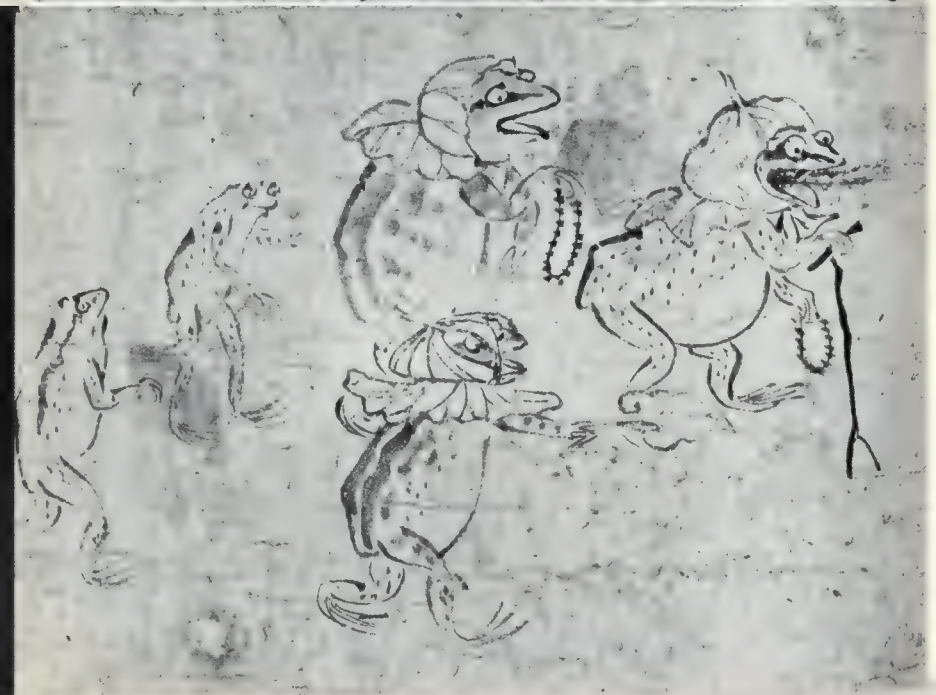
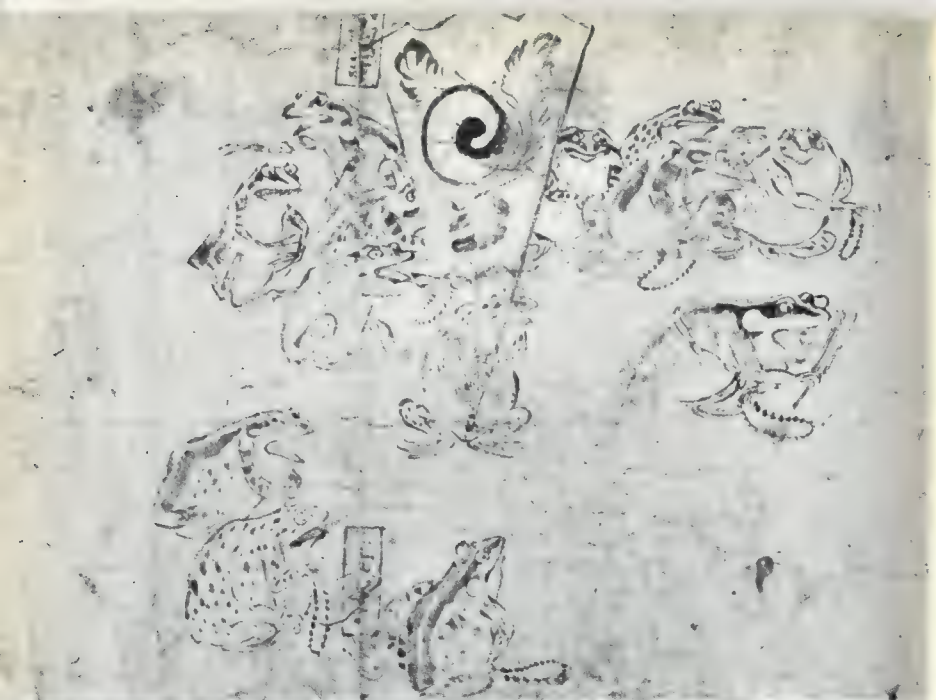
前の逃げる猿を兎と蛙が追う場面につづいて，１匹の蛙がひっくりかえり，大勢がまわりに集まっている場面があらわれる．何か事件があったらしいが詳しいことはよくわからない．ここの場面は登場人物，いや登場動物の数も種類も多い方で，見物の中でも市女笠の狐，立烏帽子の猫，恐る恐るのぞいている鼠などが目につく．そしてこの集団の終りは，いつか蛙の田楽踊りを見る一団に変ってゆく．向いあって踊る蛙の手足の振りもなかなか躍動的で面白い．この前後の場面は何を意味しているか分らないが，然し興味は尽きない．

兎と蛙の相撲が少し間をおいて二つ（前頁と本頁と）描かれている．前の場面では蛙ががっぷりと兎の耳に噛みつき，右足を兎の左足にひっかけて必死に攻めたてている気分がよく描けている．後の場面ではえいっと投げつけて気を吐く蛙，ずてんとひっくりかえる兎もいいが，それを見て笑いころげている蛙がとりわけうまい．まるでその笑い声が聞えてくるようだ．笑いの機能をもたぬ蛙に笑いの表情を与えた画家の手腕に驚かされる．蛙が兎と同じ大きさに描かれているが少しも不自然な感じがしないのもまた画家の手腕だろう．

仏の恰好をした壇上の蛙の前に，猿僧正や兎，狐が経を読み，会葬者が集っている．なかでも袖を目にあてて泣いている猿の姿が特別目をひく．蛙本尊の光背が芭蕉の葉であったり，会葬者の珠数が木の実か何かであるのも面白い．この場の様子を木の上から梟がじっと見ており，ついて猿僧正をねぎらうために御馳走の果物や引出物の虎の皮などを運ぶ兎や蛙が出てきて，この一巻は終りを告げる．こうした場面が何を意味しているか色々解釈も出ているがまだはっきりしていない．然し我々はこのままでも十分楽しむことができる．

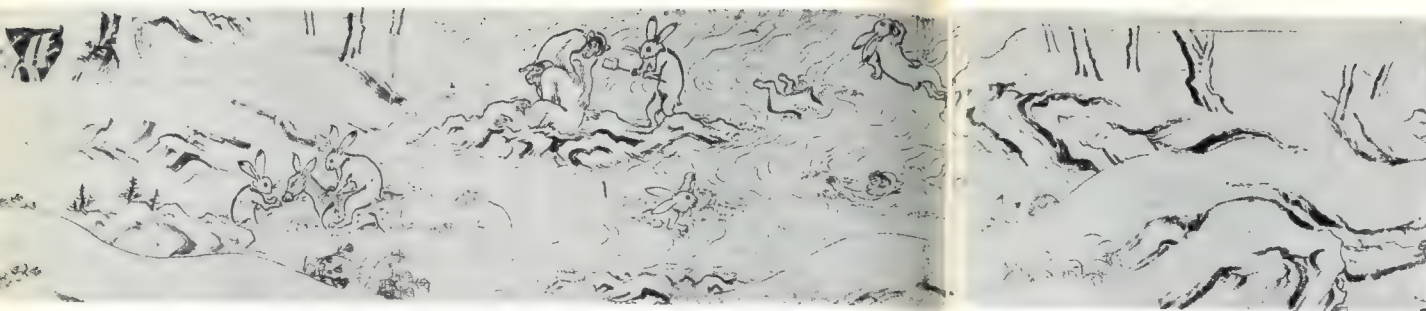
高山寺
高山寺

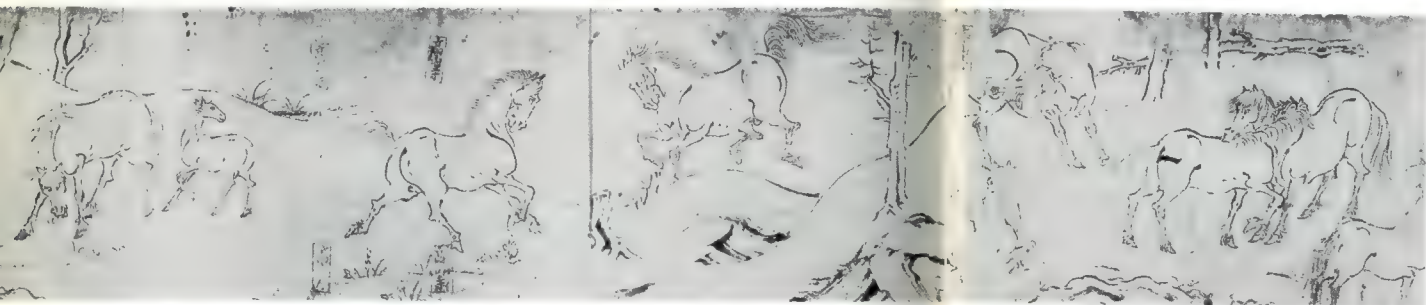
第二巻より―駆けだす馬，角突きあう牛，吠える犬，雛を追う牡鶏，空を走る麒麟，蝶を狙う獅子など，動物の生態をいきいきと描いている．この巻は戯画ではなく，厳密な態度で動物の生態を扱っている．技法としては，第一巻が墨色の味を見せ，また描線の速度，抑揚に流暢感を見せているのに対し，これは濃墨を主として淡墨を用いることが少く，形を正しく描くことに重点をおき，そのために所々胡粉で塗り消して修正したりしている．第一巻と同筆だといわれているが，この巻の方が生硬で，やや劣っている．

高山寺

第三巻より―人物を描いた部分と鳥獣の部分とは，筆が違うように思われる．どちらも濃墨を主にし淡墨を混えているが，人物画の方が墨色に味がある．人物画はデッサンは確かであるが，線に流動感が乏しく諧謔味に欠けている．鳥獣画も第一巻とは比較にならぬほど線がまずく，戯画としてのおかし味に乏しい．

第四巻より—太く角ばった線を用い，狂筆ともいうべき粗い筆法で，極端に誇張して描いている．戯画化の度が過ぎて卑俗に堕した憾みがある．四巻のうち最も劣る．

第一巻

縦一尺五分、全長三七尺八寸九分。いわゆる鳥獣戯画の名に相応する巻で、猿や兎が渓流の中で沐浴している図に始まり、僧正に扮した猿が、仏に扮した蛙の前で法会を勤めたのち供物を受ける段に終る一巻で、猿・兎・狐・蛙などが人真似をして遊び興じている光景を扱っている。四巻のうち最も傑出した作品である。

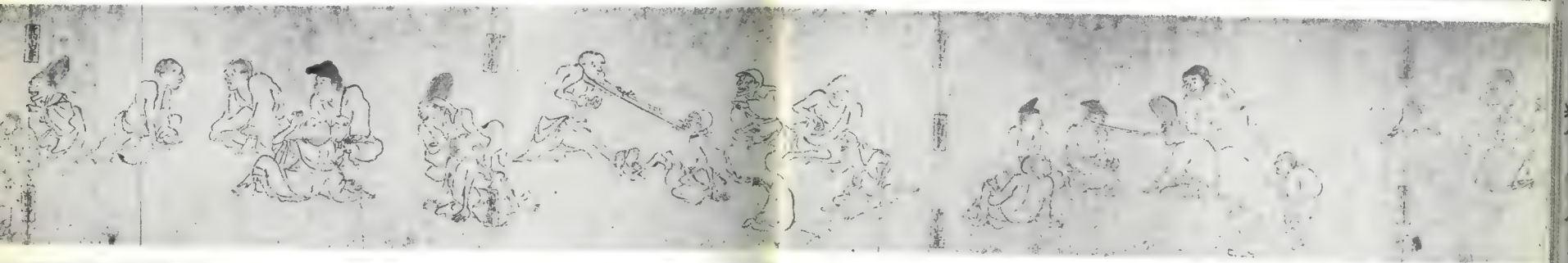
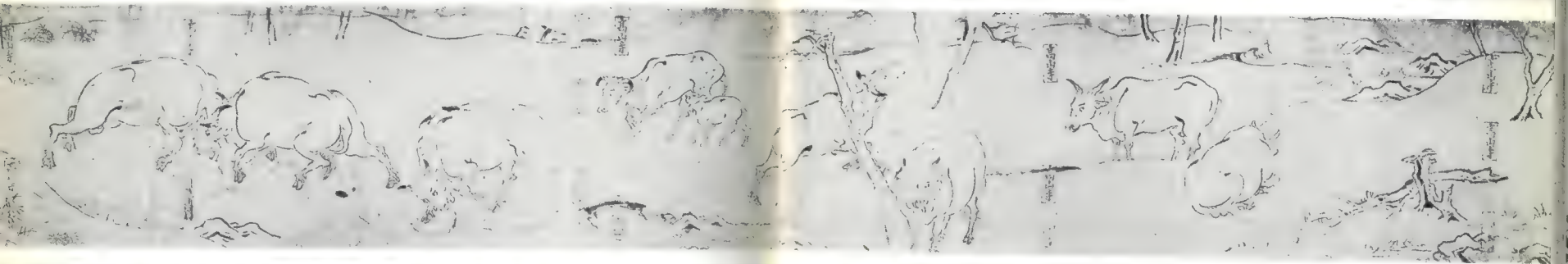
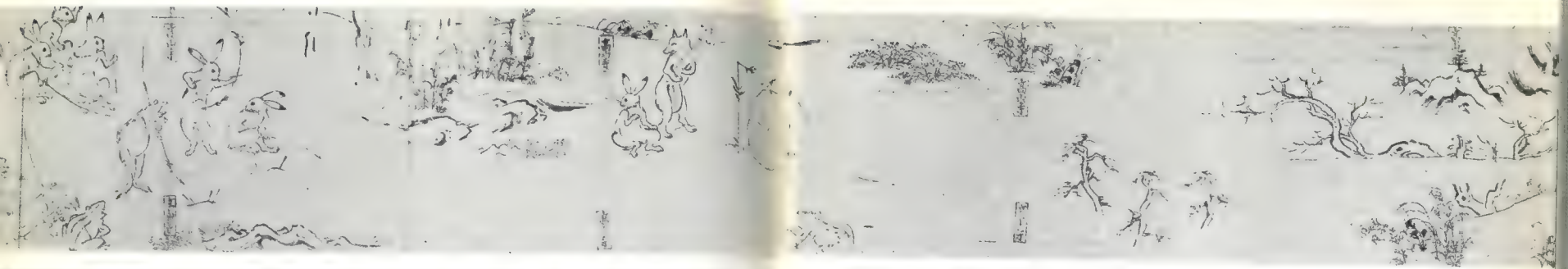
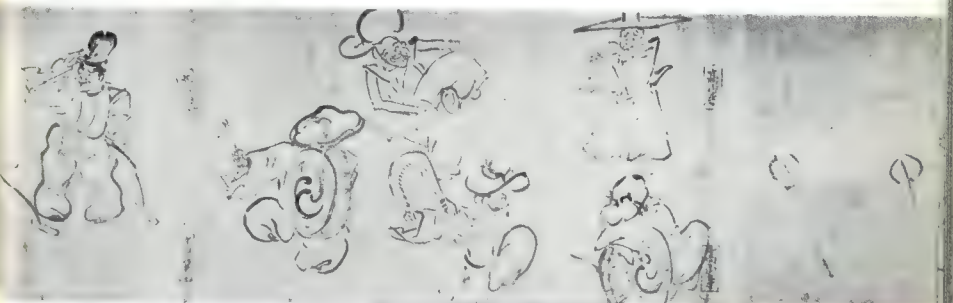
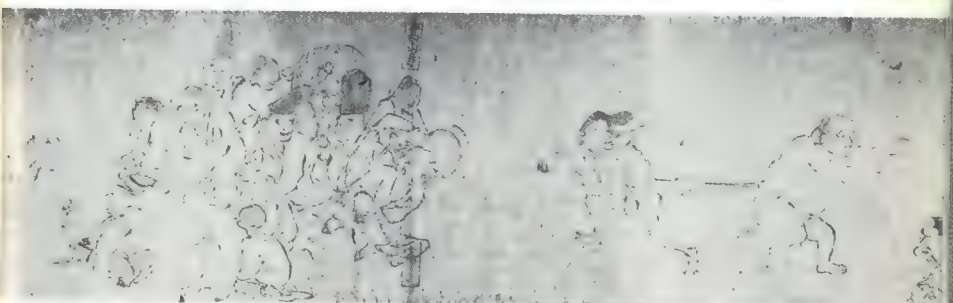
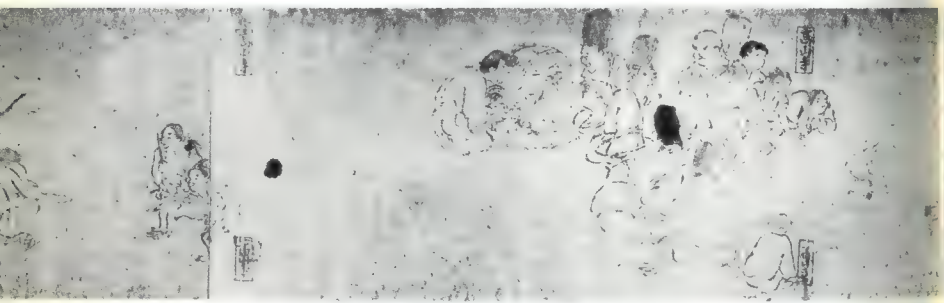
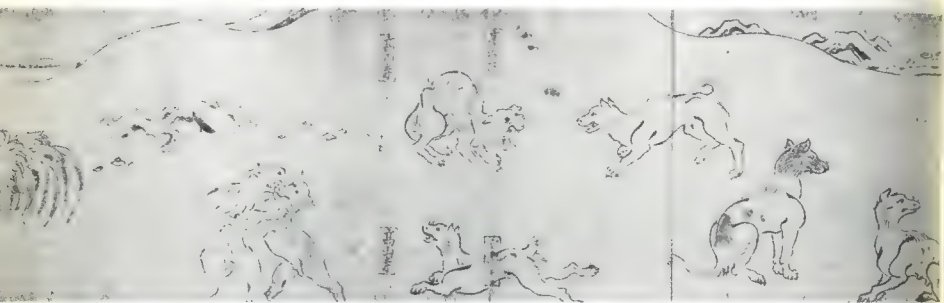
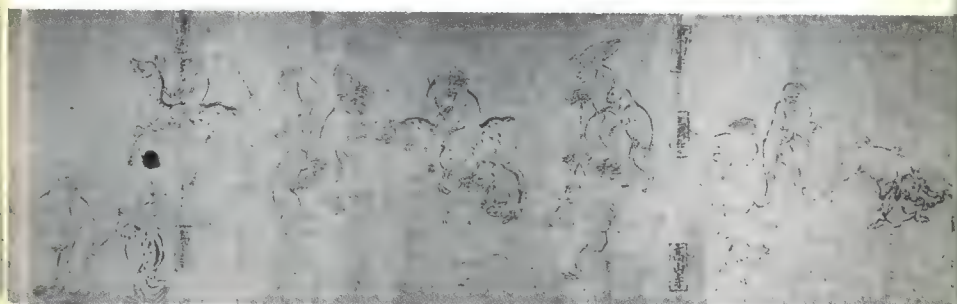
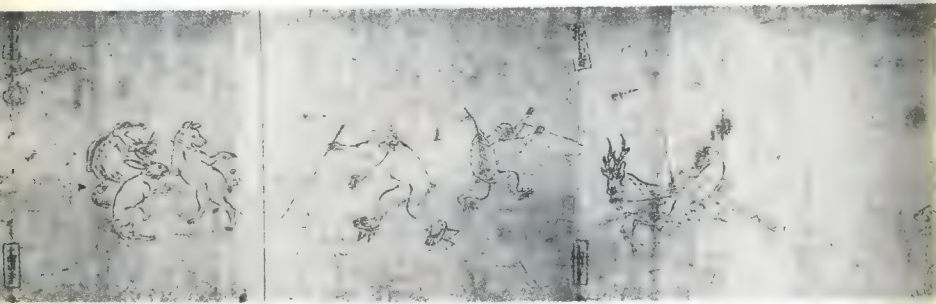
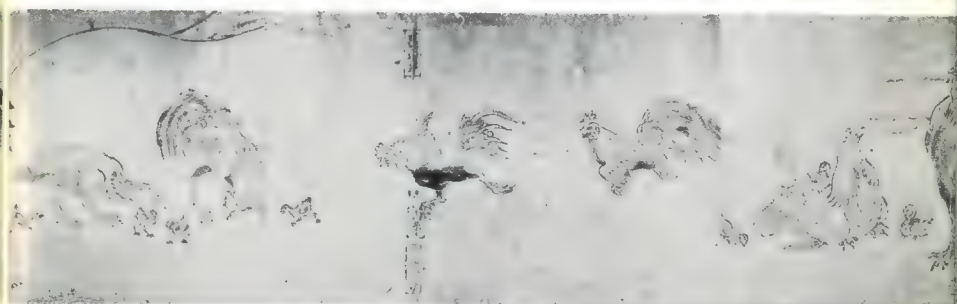
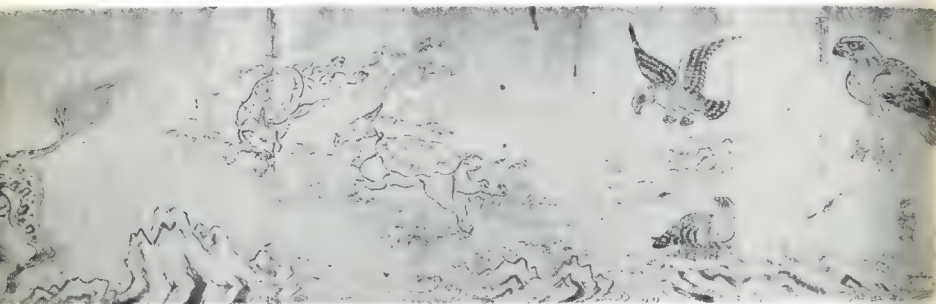
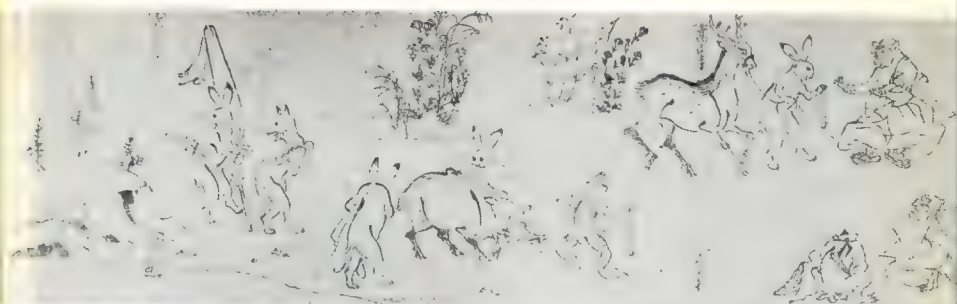
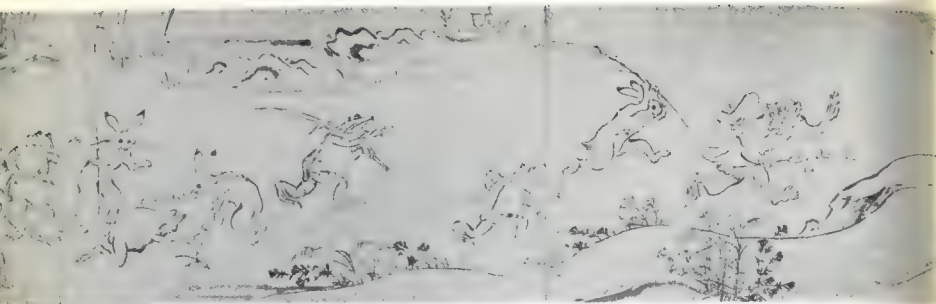
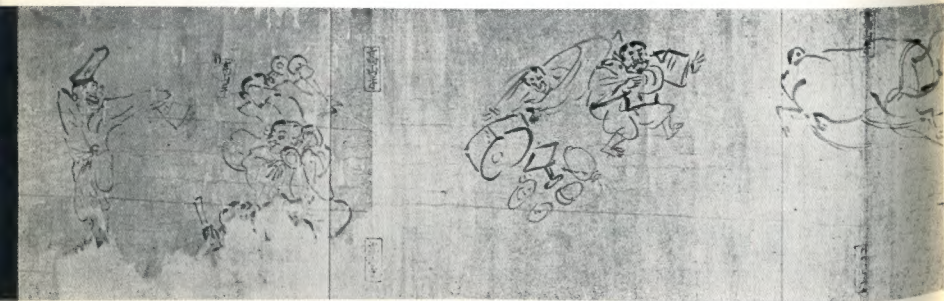
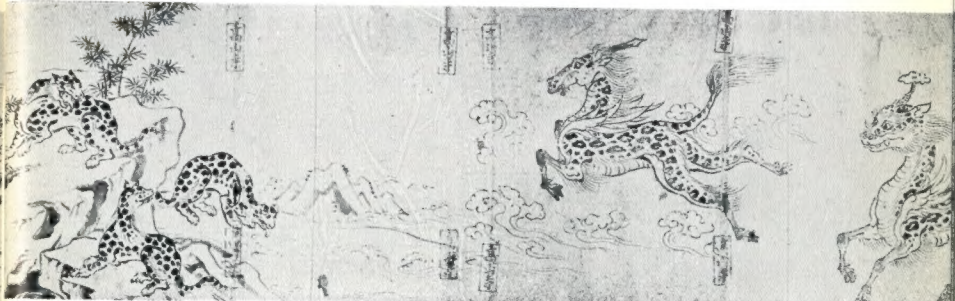
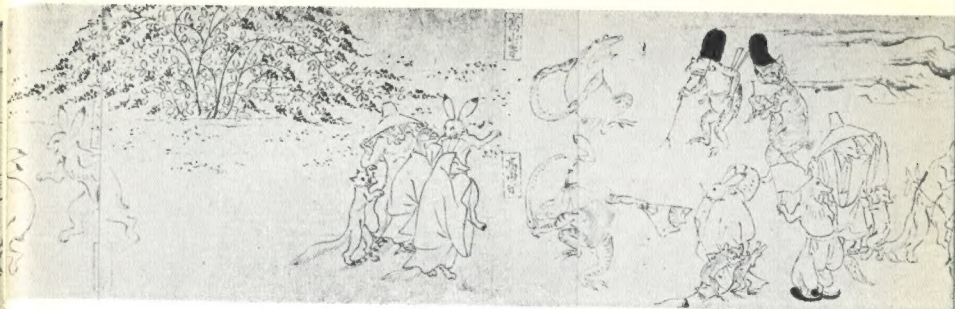
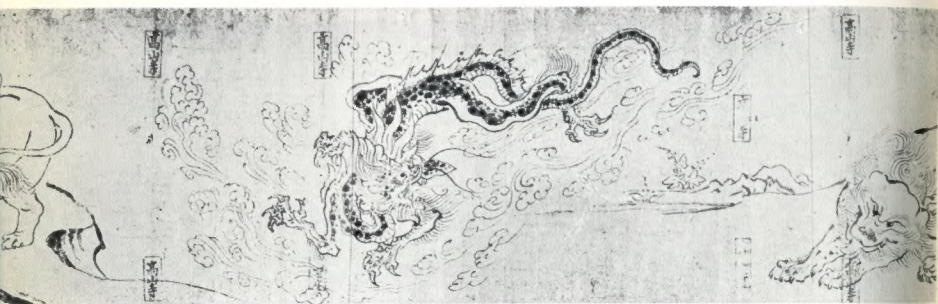
第二巻

縦一尺一分、全長三九尺二寸四分。野馬に始まり、牛・鷹・犬・鶏・鷺・水犀・麒麟・豹・山羊・虎・獅子・竜・象・獏の順で総計六九匹の鳥獣を描いている。これは他の巻のように戯画ではなく、動物の生態を羅列的に描写したもので一貫した筋はない。動物画としての形態描写が確実で、第一巻についですぐれている。

第三巻

縦一尺三分、全長三七尺三寸。前半は囲碁・双六・将棋・耳引き・首引き・睨み合い・褌引き・闘鶏・闘犬の九段を描き、後半は第一巻と主題の相似たもので、猿・兎・蛙・狐などが人真似をして遊び興ずるさまを描いている。なお末尾に「秘蔵々絵本也　拾四枚之也　建長五年五月日竹丸（花押）」の奥書がある。

第四巻

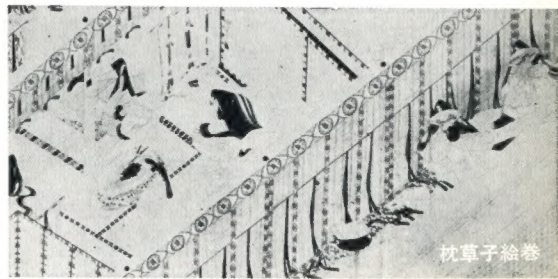
縦一尺二分、全長三〇尺八寸。この巻の主題は第三巻の前半にやや近いもので、僧侶や俗人たちが勝負事や行事を行っているさまを描いている。その描かれた遊戯の何であるか明らかでないものもあるが、法力競べ・流鏑馬・法要・球投げなど、一貫して人間の世界を描いている。描写は四巻中最も劣り、卑俗である。

鳥羽僧正のこと

鳥羽僧正が鳥獣戯画をかいたという確証のないことは前にも記したが、しかし今日では鳥獣戯画は鳥羽僧正の筆として一般に親しまれ、また鳥羽僧正といえばただちに鳥獣戯画を思い浮べるほど、この二つは密接なものとなっている。そこでこの有名な画人について一言述べておこうと思う。

彼は天喜元年（一〇五三）、「今昔物語」の著者大納言源隆国の第九子として生れ、大僧正覚円に師事して初め顕智といい、のち覚猷といった。承暦三年法橋、永保元年四天王寺別当、永久元年法眼、保安二年（一一二一）法印に叙せられ、三井園城寺の寺内に法輪院なる僧坊を建てて住んだ。天承元年鳥羽証金剛院別当となり、その後長承三年（一一三四）大僧正に任ぜられ、やがて法成寺の別当や園城寺の長吏に歴任した。後これらの職を辞して保延四年天台座主となったが間もなく辞し、保延六年（一一四〇）八八才の高齢をもって示寂した。鳥羽僧正というのは、長く鳥羽離宮の壇所に護持僧として伺候していたことから、一般にかく呼ばれるようになったもので、また三井寺の住房の名によって法輪院僧正とも呼ばれている。

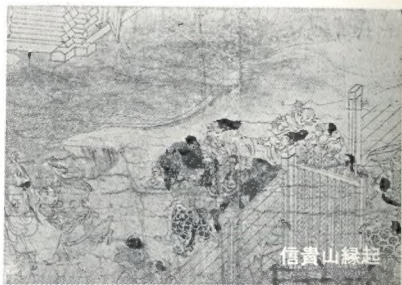
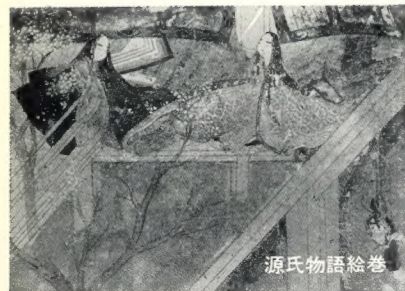
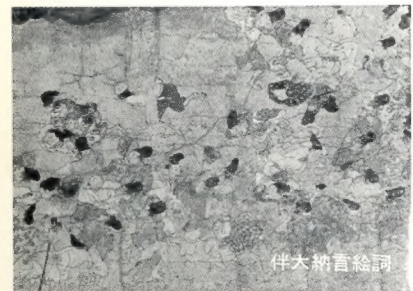
しかし鳥羽僧正の名は、僧侶としてよりもむしろ天才的な画家として人口に膾炙している。古今著聞集にも「鳥羽僧正は近き世には双びなき絵かきなり」と讃え、彼が貢米の不法を諷して米俵の風に吹上げられる光景をかき（信貴山縁起を僧正筆と伝えるのはこの伝説からきている）、また法勝寺金堂の扉絵を描いたことを伝えている。その他長秋記によれば、保延の頃待賢門院から仁和寺二階堂の扉絵を命ぜられて拝辞したことも記されている。これらの記事から察すると、彼は当時第一流の絵仏師にも比すべき本格の画をよくしたばかりでなく、諷刺的な即興画にも秀でていたことが考えられる。彼の住房法輪院は密教図像の収蔵で知られ、彼自身も図像の権威と見られているから、恐らく彼は素描画においても熟達した手腕をもっていたことと思われる。彼の画才と素描画の修練とは、必ずやこの人をして軽快な線による動的絵画に長ずるに至らしめたことであろう。従って彼の一面洒脱な性格と堪能な画才とから、後世滑稽洒落な画風のものを鳥羽絵と呼び、鳥羽僧正の名を冠したのも故あることである。

白描画について

白描（はくびょう）画というのは、鳥獣戯画のように墨一色の描線を主にして描いた絵をさしていうが、しかしこれに少しく淡彩を施したものも含めてそう呼んでいる。いま絵巻の中から白描画の代表的なものを求めると、鳥獣戯画のほかに、随身庭騎絵巻、枕草子絵巻などがある。この三つは同じく白描画といっても、こまかに見るとそれぞれちがった特徴をもっている。鳥獣戯画（とくに第一巻）は濃淡のある墨線で描かれているが、線は太く軽快で変化と速力に富み、しかもその速度は流暢性を、その変化は柔軟性をそなえている。そしてこの線の形づくる画面は、動的であると同時に説明的である。随身庭騎絵巻は一様な細い線で描いているが、鳥獣戯画と同様、線に軽快な勢いと速度がある。これは速写的な一種のスケッチとも見られるものである。これに対し枕草子絵巻は極めて細緻な輪廓線と、濃淡の度を異にする墨色の面によって構成され、その繊細な線条の配列と結合、そして生地の紙面の白色から順次に淡墨、濃墨へと移ってゆく黒白の面の諸調が、優艶な情趣を与えている。

随身庭騎絵巻

枕草子絵巻

四大絵巻

絵巻物という形式は、はじめ中国から伝えられたものである。その伝来の正確な年代はよくわからないが、奈良時代（八世紀）には絵因果経のような中国の原本を写したものがわが国でも作られている。しかしこれは純粋な日本絵巻とはいいがたい。純粋な日本絵巻が作られるようになったのは平安時代中期（十世紀）に入ってからのことで、それから絵巻物の命脈は室町時代（十六世紀）頃までつづいた。この間どれくらいの作品が作られたか知る由もないが、おそらく膨大な数量にのぼることと思われる。今日遺っている作品の数はおよそ百五十点ばかりあるが、その中でも鳥獣戯画、源氏物語絵巻、信貴山縁起、伴大納言絵詞の四つは、絵巻の世界を支える四本の柱であり、かつ絵巻の系譜の主流をなす代表的作品である。これらの作品（鳥獣戯画のみ第一、第二巻）はいずれも平安後期（十二世紀）に製作され、しかもそれぞれ異なった技法や様式によってそれぞれ別個の世界を形成している点でまた意義が深い。源氏は濃彩の「作り絵」の画風によって貴族生活を描いているが、信貴山縁起は活動的表現に適した描線本位の画風で、主として庶民生活を描こうとしている。伴大納言絵詞はこの対蹠的な二つの画風を折衷した様式で、波瀾に富む歴史的事件を描いている。この三つの作品は色彩と描線との上に成り立った作であるが、鳥獣戯画だけはまったく墨一色の描線を活用することによって、鳥獣人物の活動を表現しようとしている。これらの作品は単に絵巻の代表作というだけでなく、日本絵画史の上でも記念すべき傑作である。

源氏物語絵巻

信貴山縁起

伴大納言絵詞

鳥獣戯画

鳥獣戯画
63
¥100